

治水家の統すべ

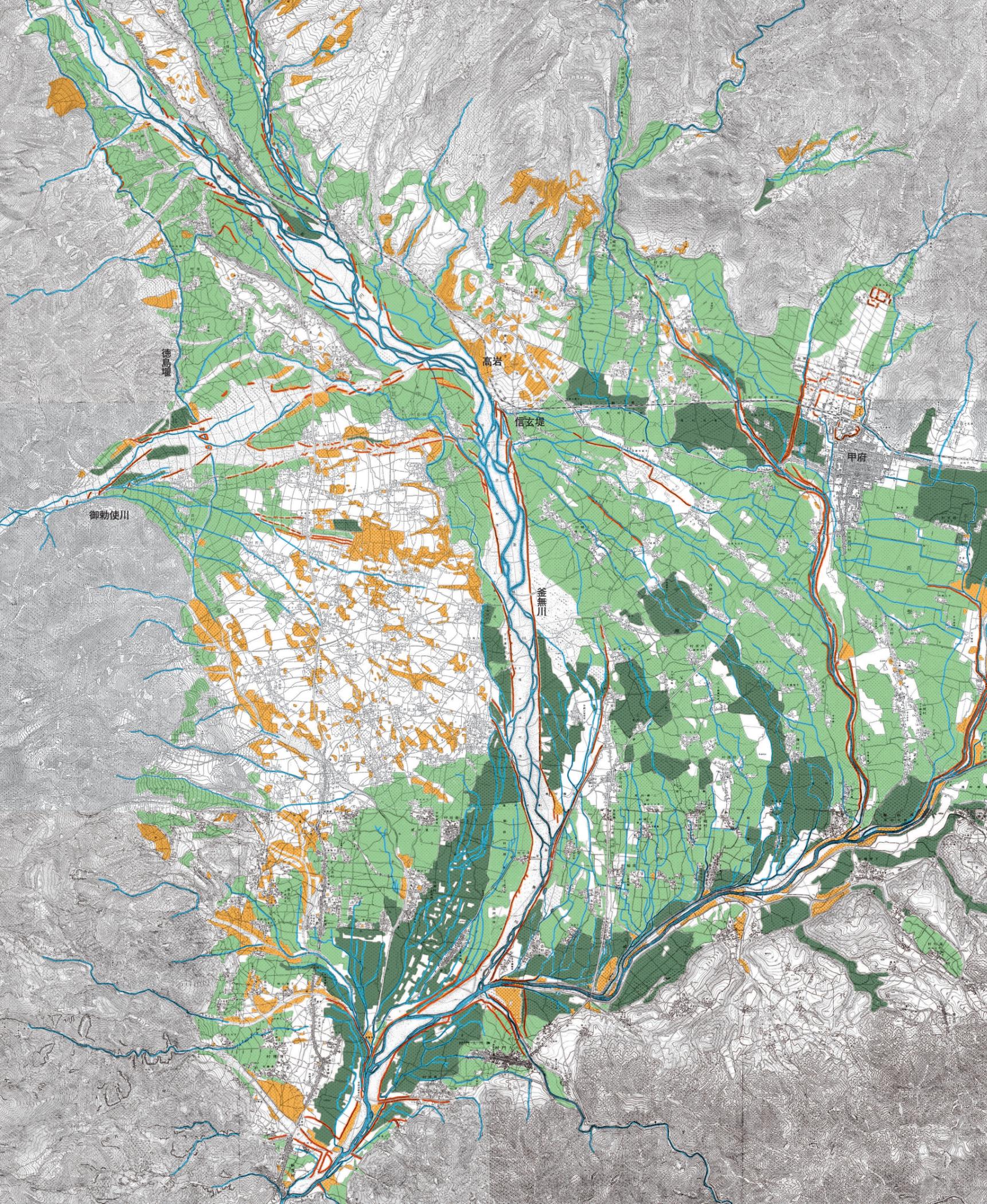
治水家といわれる人がいます。
洪水を治め、
暮らしに必要な水を手当てるために事業を行なった、
ときに偉人と呼ばれる人たちです。

しかし、
実際に土を掘り、石を運んだのは
地元の人ですし、
詳細図を引いたのは、
たぶん専門の能力を持っていた人でしょう。

では、治水家が果たした役割は、
いったい何だったのでしょうか。

そんな疑問から、
同じ扇状地であっても性質の違う
甲州と佐賀に目を向けました。
おのおの武田信玄と成富兵庫茂安が、
郷土の治水家として位置づけられています。

コンクリートの堤防も動力ポンプもない時代に、
その土地がどうやって守られてきたのか。
飲み水や農業用水を、どうやって得ていたのか。
そこに蓄えられた叡智を探ってみました。



121年前の甲府盆地西部の主な河川と土地利用

大日本帝國陸地測量部が1888年（明治21）に測量した2万分の1地図「松嶋村」「甲府」「市川大門村」「葦崎」「小笠原」「鉄澤」（国土地理院）を合成し、安達満さんの師である農業経済学者の古島敏雄（ふるしまとしお）さんにならって（16ページ参照）編集部が主だったところを着色した。

山吹色：桑畑と果樹、黄緑色：二毛作可能な田、濃緑色：水田と沼田、水色：水の流れ、赤茶色：人工的な土手。

中央南北に釜無川、その西側に扇状地をつくっているのが御勅使川（みだいがわ）、都市部の西側に南北に流れているのが荒川、南部を東西に流れているのが笛吹川、最南部ですべてが合流し富士川となる。

田んぼが「季節によって乾く二毛作可能な田」「水田」「沼田」の3つに区分されているのは、陸軍歩兵が歩行に要する時間を計算するために土の状態を表わしたため、といわれている。水が引かない歩きにくい地域や利用されていない空白地帯を、水の流れと合わせてみると、御勅使川や釜無川の元の流れや、暴れ具合が想像できる。釜無川の堤防は、霞堤（かすみでい）ではなく長く続く部分が多くなったとはいえ、意識的に分断されており、広い遊水地が用意されている。釜無川は、信玄堤より上流にも多くの人の手が入っているようだ。釜無川の流れを高岩にぶつけるために蛇行させたとも見て取れる。信玄の御勅使川の流路変更計画は、そのエネルギーを利用して釜無川を蛇行させるためだったのかもしれない。

御勅使川扇状地は、通常は水が地下にしみ込み、ワジ（注：雨季になると急激に出水することがある、普段は流水のない涸れ川）のように地表は乾いてしまうようだ。御勅使川の流れを変える信玄の治水工事は、水のない状態での作業だったのだろう。その甲府盆地西部の砂礫地帯に田んぼがつかれるようになったのは、江戸時代初期に釜無川上流から引いた徳島堰の功績だ。また、扇状地南部に沼田が多いのは、いったん砂礫地帯に染み込んだ地下水が、湧水として地表に湧き出してくる土地柄だからかもしれない。

水の文化 32号 2009年7月

特集「治水家の統」

現代に求められる治水家意識
歴史が語る、近代治水の変遷 松浦茂樹

扇状地における流水コントロールシステム
武田信玄の総合的治水術 和田一範

石高変遷から探る、甲府盆地の治水と開発
暮らす人の知恵と術 安達満

シリーズ里川
水の都大阪の渡し 藤原光弘

佐賀の歴史的水辺を検証する
成富兵庫茂安の足跡 島谷幸宏

海と川と土をつなぐクワーク
佐賀平野を養う水利用 宮地米蔵

水の文化楽習実践取材 「水の会」の18年の歩み
堀の記憶が成し遂げた、柳川再生物語 編集部

水の文化書誌 利水あつての治水か 古賀邦雄

文化をつくる 治水家の統 編集部

ミツカン水の文化交流フォーラム2009 開催のご案内

インフォメーション

51 50 48 46 40 34 26 22 16 10 4